

## 「たまたま」と「偶然」の比較研究

田岡 育恵

情報科学部 情報メディア学科  
(2017年5月31日受理)

### A Comparative Study of Japanese “Tamatama” and “Guuzen”

by

Ikue TAOKA

Department of Media Science,  
Faculty of Information Science and Technology  
(Manuscripts received May 31, 2017)

#### Abstract

When the meanings of the Japanese adverbs “tamatama” and “guuzen” are described in dictionaries, both are used to describe the meaning of the other word, which suggests that their meanings are the same. However, in some cases only “tamatama” is acceptable, but not “guuzen.” When we recognize the contingency of the situation so strongly that we decide to express it, “guuzen” is used, which is an adverb of contingency. On the other hand, “tamatama” can also be used when the situation is caused intentionally, which is not the case with “guuzen.” This suggests that what “tamatama” expresses is not contingency itself. Through observation of the usage of “tamatama,” I think that the word expresses that the speaker does not consider the situation or what has happened to be important. Both “guuzen” and “tamatama” express the speaker’s mental attitude towards the situation, therefore, both are expressions of modality. The difference is that in the case of “guuzen,” the speaker is somewhat surprised at what has happened while in the case of “tamatama,” the situation expressed in the sentence is not particularly important for the speaker.

キーワード ; 偶然性, 偶然性の副詞, 事態に伴う驚き, 事態に対する話者の心的態度

Key Word ; contingency, adverbs of contingency, surprise at events, the speaker’s mental attitude towards the event

## 1. はじめに

日本語の「たまたま」と「偶然」(副詞)は、次のように辞書において互いを意味の記述に用い、両者は同義のように考えられている(下線は筆者による)。

- (1) a. **たまたま** (副) ①偶然. ちょうどその折.  
「——犯行現場にいた」②まれではあるが、  
時折。「あの人は——道で会う」  
b. **偶然** 曰(副)ふと.たまたま. はからずも.  
「一聞いた話」 (『広辞苑』(6版))<sup>1</sup>
- (2) a. **たまたま** (副) ①時おり. 時たま. たまに.  
「春とはいえ一寒い日がある」②偶然に. ち  
ょうどその時. 「一駅で旧友にあった」  
b. **偶然** 曰(副) 思いがけないことが起こるさ  
ま. たまたま. 「一旧友に出あう」(『大辞泉』  
(初版))<sup>2</sup>

「たまたま」は『広辞苑』でも『大辞泉』でも品詞は副詞のみであるが、「偶然」には、副詞に加えて『広辞苑』では名詞、『大辞泉』では名詞と形容動詞の品詞も挙げられている。しかし、どちらの辞書においても、「たまたま」と副詞の「偶然」は互いの意味の書き換えに用いられている。では、「たまたま」と「偶然」は本当に同義と言えるのだろうか。

- (3) a. たまたま偶然です。  
b. ?偶然たまたまです。

(3a)はいいが(3b)はおかしい。これは、辞書で形容動詞の用法が「偶然」にはあるので、(3)の場合、副詞の「たまたま」はその前に来るということだろう。しかし、「偶然」を副詞で用いる場合にも「たまたま」とは違うと思われることがある。たとえば、「?偶然、運が悪かった」はおかしいが、「たまたま運が悪かった」はおかしくはない。

- (4) a. ?偶然、運が悪かった。

- b. たまたま運が悪かった。

KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言で「たまたま運が・・・」で検索したところ、(5)のような例が4件ヒットしたが、「偶然、運が・・・」はゼロ件であった。

- (5) まあ、たまたま運が悪かったということでしょう。<sup>3</sup>

「偶然」の用例と「たまたま」の用例について互いの置換可能性をみると、「偶然」は「たまたま」に置換しても容認可能な文になるが、「たまたま」を「偶然」で置き換えると容認不可能になると思われる場合が見られる。「たまたま」と「偶然」は本当に同義と言えるのだろうか。本稿では、この問いについて考えてみたい。なお、本稿で用いる例文は、KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言、インターネットで見つけた例、小説で見つけた例、出典を記載していない場合は、筆者の判断にもとづく作例(他の日本語母語話者にも確認)である。

## 2. 先行研究

「たまたま」と「偶然」の違いというと、よくそれは和語と漢語の違いだと言われる。たとえば、中村(2010)は、「たまたま」と「偶然」の違いについて、次のように述べている。

- (6) (偶偶)「偶然に」の意で主に会話に使われる和語(s.v.「たまたま」)、因果関係がなくたまたまの意で、砕けた会話から硬い文章まで幅広く使われる日常漢語(s.v.「偶然」)。<sup>4</sup>

「偶然」は漢語、「たまたま」は和語という違いもあるだろうが、(7a, b)のように口語体でも「偶然」が用いられることはあり、「偶然」は漢語だから口語体にはなじまないということでもない。

(7) a. ほしいなあと思っていたものが、偶然、手に入ったりラッキーな人ね。<sup>5</sup>

b. 携帯番号すら知らなかった。それが偶然、仕事の出先でばったり。<sup>6</sup>

森田 (2014) は、「たまたま」を、かなり間をおいて物事が起こることを表す「たま」の繰り返し形式ととらえ、起こる回数が「たま」より多くなる場合と間の置き方が大きくなる場合に分けている。前者の用法は、筆者の日本語感覚では使用は稀に思われる。本稿の「偶然」と同様に使用されるのは後者の用法であり、その記述を(8)に引用する。

(8) 「たま」よりも間隔の開きが大きくなる場合  
 “たまにたまに”つまり“極めてたまに”の意味である。自分の意思とは無関係に、あるいは、そうとは知らず、その当人がある状況に身を置いてしまったのであるが、それが特別の意味を持った状況であった場合に用いる。そのような特別の状況にはからずも身を置くということは、ほとんど絶無に近いたまにしか起こらぬことゆえ、その出食わした当人からみれば、“偶然に”“ちょうどそのおりもおり”“実に思いがけなくも”といった気分が伴う。期せずしてある特別の状況や事態に出会い、かかわりが出来たのである。<sup>7</sup>

森田は、「たまたま」で表される事態は「ほとんど絶無に近いたまにしか起こらぬこと」としている。「たまたま」が表す事態が常に起こることではないのは確かだと思うが、稀にしか起こらないことというのは当てはまらない例がある。たとえば、(9)のような場合がそうである。独身であること、カップ麺があることなどが稀なこととは考え難い。

(9) a. このケースの場合は、相手の男性がたまたま独身でしたから、ふたりは結婚することになりましたが、…<sup>8</sup>

b. たまたまカップ麺があったので、それを食べました。

### 3. 「偶然」が容認されない場合

では、「たまたま」と「偶然」の置換可能性を見ていこう。

(10) (たまたま/偶然)、その文書を見つけた。

(11) 昨日、(たまたま/偶然)、彼に会った。

これらの場合は、「偶然」も「たまたま」も、どちらも「その文書を見つける」、「彼に会う」という事態が予期せずして起こったということを表していて、「偶然」でも「たまたま」でも変わりはないように思われる。どちらの場合も、「その文書を見つけようと思っていたわけではない」、「彼に会うと思っていたわけではない」と、話者はそれぞれの事態成立についての非意図性を表していると思われる。

しかし、次のような例はどうだろうか。これらでは、「たまたま」はよいと思われるが、「偶然」はおかしいと思われる。

(12) その日は、(たまたま/?偶然)雨が降っていた。

(13) (たまたま/?偶然)風邪を引いていて調子が悪かった。

(12)は天候、(13)は体調と、偶然性を表す副詞がなくても、本来、人の意志で成立可能な事態ではない。(12)、(13)の場合、何故「偶然」を用いるとおかしくなるのか。元々、非意図的な事態について「偶然」という副詞を用いると、冗長でおかしいということだろうか。しかし、「偶然」の用例を見ていくと、次のように、元々、偶然としか言いようのない事態でも「偶然」が用いられていることがある。

(14) 坂田春美という名のその職員の郷里は私と同じ仙台で、偶然、彼女は私の高校の先輩でもあ

った。<sup>9</sup>

- (15) 先日、買い物に出かけようと、歩道を歩いていたら、偶然、周りにほとんど人が歩いてなく、バスも通る幹線道路なのに、ピタッと車も通らず。<sup>10</sup>
- (16) それで偶然、あたしたちがそこに迷いこんだってこと？<sup>11</sup>
- (17) 理性では、一卵性双生児のような場合や、偶然、よく似てしまう可能性がある、わかっているも...<sup>12</sup>
- (18) 偶然、同じ苗字だけだと思いますが。<sup>13</sup>

「同じ高校の出身である」、「周りに人がいない」、「迷いこむ」、「似ている」、「同じ苗字になる」は、どれも自分の意志で成立させることのできる事態ではない。このような例があるので、「偶然」は、本来、自分でコントロールできない事態には冗長になるのでおかしいとは言えない。

では、(12)、(13)では、何故「偶然」はおかしいのか。他方、何故「たまたま」はおかしくないのだろうか。それについて考える前に、我々が事態の偶然性を意識するのはどのようなときなのかについて確認しておこう。

#### 4. 事態の偶然性が意識されるとき

3節では、「偶然」がおかしい例を見たが、次の例では「たまたま」の使用もおかしい。

- (19) (自己紹介で) 私は (?たまたま/?偶然) 田中です。
- (20) A: 今日、何曜日?  
B: (?たまたま/?偶然) 今日は火曜日よ。

名前や曜日を言うときに「たまたま」が共起することができないのかと思えば、次のように「たまたま」と共起している場合がある。

- (21) 「わしは中日ドラゴンズファンにはいつもホシノちゃんと呼びかけることにしている。たとえ何があろうと、巨人といえばナガシマ、中日といえばホシノじゃないか」「でもさ、おじさん、俺の本名はたまたまホシノっていうんだ」<sup>14</sup>
- (22) もしお時間があればということですが、2時から館内の簡単なツアーがあります。みなさんのご希望があれば、いつも火曜の午後に行っているんです。この図書館の由来などを館長がご説明します。たまたま今日は火曜日です。<sup>15</sup>

(21)、(22)では、何故「たまたま」を用いて違和感がないのだろうか。これには、先行文脈が関わっている。(21)では、中日ドラゴンズファンだからホシノと呼ぶという相手に対して、自分の名前はホシノだけれども、それは偶然で、中日ドラゴンズファンだからホシノというわけではないのだと言っている。つまり、ここでは、自分の名前がホシノであることの偶然性を殊更に強調する必要があると言えよう。(19)のように、自己紹介で最初に名前を言う場合とは違う。

自己紹介の場面であっても、たとえば、その前にホシノさんという人が自己紹介した後だとしたら、「たまたま」や「偶然」を用いることはおかしくないだろう。「先の方もホシノさんでしたが、(たまたま/偶然) 私の名前もホシノなんです」と、自分の名前もホシノだという偶然を強調する文になるからである。

(22)は、あなた方が来たから館内ツアーをしようと言っているのではなく、元々、火曜日なので館内ツアーをする日であり、館内ツアーの日(=火曜日)があなた方の来日に重なった偶然性を表している。つまり、(21)、(22)の場合は、殊更に事態の偶然性を強調する必要のある文だから「たまたま」が容認されるのだと考えられる。

野内(2010)は、「偶然」について、以下のように述べている。

(23) 偶然は二つのもの(遇)が交わることを意味しているらしい。「遇」は「たまたま」も意味している。偶然は「たまたま(遇)しか(然)ある」を意味している。してみれば、偶然とは二つのものがたまたま出会うことを意味していると考えてよさそうだ。偶然性は「かならず(必)しか(然)ある」を意味する必然性と対立する概念ということになる。<sup>16</sup>

これによれば、人であれ物であれ2者が出会う、あるいは2つの事態が重なる場合に、我々は偶然性を意識することがあるということである。

「偶然」の用例に見られる事態で多いのは、(24)のような場合である。(24a-d)では、人であれ物であれ場所であれ、AとBの2者が事態に関係している。

- (24) a. (AとBの2者が出会う、合わさる) 出会う・巡り合う・出くわす・鉢合わせする・乗り合わせる・一緒になる・居合わせる・知り合う・当たる, など.
- b. (AがBを見つける, 認知する) 発見する・を見つける・拾う・手に入る・目にする・見かける・目撃する・目をやる・見る・聞く・読む, など.
- c. (AがBという場所に出現する) 現れる・来る・姿を見せる・通る・そこを歩いている, など.
- d. (AとBが同じ時空に存在する) 同じ時間に・同じ場所に, など.

では、(25)で「たまたま」や「偶然」を用いるとおかしいのは、「死ぬ」のように2者のかかわりのない事態だからだろうか。

(25) 彼は、昨年(？たまたま/？偶然)死んだ。

しかし、次のように、「たまたま死ぬ」が容認可能

な例はある。

- (26) 突き飛ばしただけだ。それで、たまたま死んだ。それだけだ。<sup>17</sup>
- (27) 平成16, 17年に鳩山の収支監査をやった花田順正税理士が衆院選の前日にたまたま心不全で死亡。<sup>18</sup>

(26)では、「たまたま」が、突き飛ばしたことと死亡との関連づけを否認している。(28)のように、「たまたま」がなければ文意が変わってくる。突き飛ばしたことが原因で死亡したことになる。

(28) 突き飛ばしただけだ。それで、死んだ。

(27)の「たまたま」は、税理士の死亡とその税理士が鳩山の収支監査をしたということとの関連づけを否認するのに用いられている。

(27)の場合、(29)のように「たまたま」を「偶然」に置き換えても文はおかしくないだろう。

(29) 平成16, 17年に鳩山の収支監査をやった花田順正税理士が衆院選の前日に偶然、心不全で死亡。

次の(30)のように、「彼が亡くなったこと」と「その日であったこと」の偶然性を殊更に強調する場合なら「たまたま」も「偶然」も用いることができるだろう。

- (30) a. たまたま彼はその日に亡くなったんです。  
b. 偶然、彼はその日に亡くなったんです。

(26), (27), (30)に関わる2つのこととは、ある人の死亡と、それぞれ「突き飛ばしたこと」、「政治家に関わっていたこと」、「亡くなったのがその日であったこと」であり、その因果関係を、偶然性を表

す副詞で否認し事態の偶然性を強調していると言えよう。

次の(31)では、「フランス人だから結婚したのではない」と、「その人がフランス人であること」と「その人と結婚したこと」との関連づけが否認されるので「たまたま」はおかしくない。他方、(32)では、そのような関連づけの否認が考えられないので「たまたま」はおかしいということになる。

(31) 私が結婚した相手は、たまたまフランス人でした。

(32) A: あの人は、どこの国の人なの？

B: ?あの人は、たまたまフランス人よ。

(31)の「たまたま」も「偶然」に置き換えても容認可能ではないか。(33)に多少違和感を覚える場合でも、(34)のように、分裂文で事態の偶然性を強調することはできると思われる。

(33) 私が結婚した相手は、偶然、フランス人でした。

(34) 私がフランス人と結婚したのは偶然でした。

野内は、偶然性の認識について、(35)、(36)のように述べている。

(35) 偶然が問題化するためには驚きの情がともなわなければならない。驚きの情を引き起こさなければ、くだんの接触は起こる可能性のあった当然の出来事として認識されるか、あるいはまったく気づかれずにやり過ごされてしまうかだ。偶然性は「今、ここ」での驚きの情である。偶然に固有の時間性は現在である。そして偶然に固有の感情は驚きである。<sup>19</sup>

(36) 「偶然」というのは2つの出来事の組合せに我々の関心が引かれるときに認められるものだ。<sup>20</sup>

野内が言うように事態の偶然性が強く意識される場合は副詞「偶然」を用いることができ、偶然性がさほど意識されない場合は「偶然」は容認されないということではないか。「偶然」を用いることのできた(14)から(18)では、それぞれ、彼女と同じ高校だったこと、人気がなかったこと、思いも寄らぬところに迷い込んだこと、何かが似通っていたこと、同じ苗字だったことについて、程度の差こそあれ、気づいた事態に驚きがあり、事態の偶然性を意識した。だからこそ「偶然」が用いられているのだと考える。これらは、(37)のようにその偶然性を分裂文で強調することが可能である。

(37) a. 彼女が私の高校の先輩だったというのは偶然でした。

b. 周りにほとんど人が歩いていなかったのは偶然でした。

c. あたしたちがそこに迷い込んだのは偶然でした。

d. それらがよく似ているのは偶然でした。

e. 同じ苗字だったのは偶然でした。

これに対して、(12)、(13)では、雨が降ったこと、風邪を引いたことに対して、強く偶然性を意識することはない。つまり、野内が言うような事態に遭遇した驚きは認められない。したがって、「偶然」の使用もおかしいということになる。

(38) a. ?雨が降っていたのは偶然でした。

b. ?風邪を引いていたのは偶然でした。

ただし、驚きを伴う事態であれば常に「偶然」が容認されるわけではない。たとえば、(39)のような場合は「偶然」はおかしいだろう。大きなショックを受ける事態に遭遇した場合、事態の偶然性を認める心の余裕はないからである。

(39) ?さっき, 偶然, 車に轆かれそうになった.

野内(2010)は, 偶然を意識するときの驚きについて, (40)のように述べている.

(40) 偶然がもたらす驚きのなかでいちばん偶然らしさが感じられるのは小さな驚き, こちらの予想がちよつとはぐらかされたときに感じる驚きである.<sup>21</sup>

以上を踏まえて, 偶然の意味を(41)のように考える.

(41) 「偶然」の意味 事態の偶然性を表す. 事態の偶然性とは, 予想していなかった事態を知ったときの驚きである. しかし, 話者は, その事態をある程度の余裕を持って受け止めていると考えられる.

では, 何故, 「偶然」が容認されない場合でも「たまたま」は容認されるのか. 「偶然」でも「たまたま」でも容認可能な「昨日, (たまたま/偶然), 彼に会った」をもう一度見てみよう.

- (42) a. 昨日, 偶然, 彼に会った.  
b. 昨日, たまたま彼に会った

(42a)は, 彼に会った事態を主語の意図しない偶然の出来事として表している. これに対して, (42b)は, もちろん意図せずに彼に出会った場合も考えられるが, 彼に連絡して会った場合でも用いられるのではないか. たとえば, 彼と連絡を取って会うことがあった, その翌日に職場でその彼の話が出たときに, 「昨日, たまたま彼に会いました」というのは自然だと思う. この場合, 「偶然」を用いることはできない.

(43) (彼に連絡して会った. 翌日, 職場でその彼の話が何かの折に出て)(たまたま/?偶然)昨日, 彼に会いました.

(44)のように「何々してみた」という意図的な行為の場合, 「偶然」はおかしいが「たまたま」はおかしくない. 「たまたま」の場合は, そこへ行った偶然性を表す文ではなく, 「こんなことがあったのですが」と, 事態を軽く示す文になる. これに対して, 「偶然」では「何々してみる」という動詞句の明らかな意図性が「偶然」が表す事態の偶然性と矛盾するのでおかしくなる.

(44) 私, (たまたま/?偶然)そこへ行ってみたことがあるのですけれど.

もう1例, 挙げよう. (45)は, 別に番狂わせのハプニングが起こったために得られた勝利だと言っているのではない. そのような場合も考えられるが, ふつうに勝った場合でもこのように言うことはあるだろう.

(45) たまたま前回の試合に勝ったからと言って, いい気になってはだめだ.

このような例から, 「たまたま」は本当に事態の偶然性を表すものなのかという疑問が起こる. 次節では, 「たまたま」が表すニュアンスについてみる.

## 5. 「たまたま」を用いるときの話者の心情

「たまたま」の用例を見ていくと, 話者が事態の重要性を低く見ていると思われる表現との共起が目立つ. たとえば, 次のような場合である(下線は筆者による).

(46) たまたま幸せを感じさせてもらえることはあったとしても,...<sup>22</sup>

(47) これは、「時代の気分とたまたま一致した」というほどのことでしょう。<sup>23</sup>

(46)の「あったとしても」というのは、「そのようなことはない」を前提にしている。一般に、生起回数が少ないと思われる事態はさほど気に留める必要のない事態と思われる。(47)では、「というほどのこと」という表現が事態の重要性は低いと話者が思っていることを表している。次の(48)から(51)においては、「だけ」という副助詞の使用が、話者がそれぞれの事態の重要性を低く見ていることを示唆する(下線は筆者による)。

(48) たまたま女に生まれただけなのに、女であるというだけで門戸が閉ざされたり、美人か否かで評価されるという抑圧を私たちは受けている。<sup>24</sup>

(49) それがたまたま市町村道であるか農道であるかという、ちょっと名前が違うだけで、道路自体むしろ農道の方が立派なところが随所にある。<sup>25</sup>

(50) 文化系でも頭悪いですよ。今回の事件はたまたま体育会系だけだ。<sup>26</sup>

(51) 1才3ヶ月ですから、左ききなのかどうか判断するのは、まだちょっと早いようです。たまたま今の時期に限って、右手より左手のほうが使いやすいだけ、ということもあるからです。<sup>27</sup>

(48)では、女であるということが門戸を閉ざす理由として重要な理由ではないと言っている。(49)は、道路の名称の違いは道路の立派さにおける重要な要因ではないということである。(50)は、今回の事件は体育会系に限られることではないと、話者は体育会系であることの事件の要因としての重要性を低く見ている。(51)は、「今の時期に限って」という限定により、話者は左手のほうが使いやすいことの重要

性を低く見ていることが分かる。更に例を挙げる。(52)、(53)の下線は筆者による。

(52) 点を取るしかない状況で、僕がたまたま本塁打を打てた。あのときはチームメートもベンチの雰囲気も絶対に点を取るという空気だったので、そこに乗せられて打ちました。<sup>28</sup>

(53) ひたすら一次落ちを繰り返し、今回たまたま受賞したので、..<sup>29</sup>

(52)では、本塁打を打ったことをチームの雰囲気に「乗せられて打った」と、自分以外の力によることであるように表し、自分の手柄になり得ることの評価を下げている。(53)も、受賞以前には何度も一次落ちしていたということを「ひたすら一次落ちを繰り返し」と自虐的に表現し、自分の受賞の価値を下げている。「たまたま」のない(54)では、そのような謙虚さは認められない。

(54) a. 僕が本塁打を打てた。  
b. 今回受賞したので

このような謙虚さや事態の重要性を低く表しているというニュアンスは「たまたま」に認められる特徴と考える。

(12)、(13)の例に戻ろう。(12)、(13)では、「雨が降っていた」、「風邪を引いていた」という事態は常識的に考えて特筆すべきことではなく、話者が重大な事態とは思っていないので「たまたま」が用いられるのである。他方、そのような事態になったことに対する話者の驚きは考え難いので「偶然」はおかしいということになる。

(13)の「たまたま風邪を引いていて」に対して、これが風邪ではなく癌のような深刻な病気の場合なら「たまたま」を用いることができるだろうか。話者がわざと軽く事態を表現しようとしているのであれば、(55)のように言わないだろう。



(55) ?たまたま癌になっていて、調子が悪かった.

次の(56)では、「たまたま」で表される事態を話者が重要視していないということを示唆するからこそ、「たまたま、というのはかなり遠慮がちな表現だ」と言っているのだと考えられる。

(56) 「そして彼はたまたまおまえの家のかなり近くに住んでいる」「そのとおりで」「たまたま、というのはかなり遠慮がちな表現だ」<sup>30</sup>

(57a)は歌詞の一部であるが、「偶然」が用いられていればこそ出会いの運命が効果的に表されているのであって、これを同じような意味だからと、(57b)のように「たまたま」に置き換えると、出会ったことの感動が薄れるようである。「偶然」では、事態生起の偶然性に対する話者の感慨が感じられるが、他方、「たまたま」では話者は事態をそう重要なこととは思っていないことになるからである。

(57) a. あの日 あのとき 偶然に出会っていたから夢がある。<sup>31</sup>

b. あの日 あのとき たまたま出会っていたから夢がある。

最後に、「たまたま」で表される事態を話者はさほど重要なこととはみなしていないと述べてきたが、わざわざ「たまたま」を用いるからには、話者がその事態を敢えてその程度のこととして示したという、そのような話者の事態に対するこだわりはあるものと考えられる。

以上のことを踏まえ、「たまたま」の意味を(58)のように考える。

(58) 「たまたま」の意味 話者が事態を重要視していないことを示唆する。事態に対するそのような話者の心的態度を示す。

## 5. おわりに

「偶然」も「たまたま」も、話者が事態を認識したときのその心情を表すモダリティ表現だと考える。その違いは、「偶然」は思いも寄らぬことに遭遇した話者の驚きを表し、「たまたま」は話者が事態をさほど重要とみなしていないという話者の心的態度を表すものと考えられる。

## 注

- <sup>1</sup> 新村出(編)『広辞苑』(6版)東京:岩波書店, 2008年.
- <sup>2</sup> 松村明(監修)『大辞泉』初版, 東京:小学館, 1995年.
- <sup>3</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.
- <sup>4</sup> 中村明『日本語 語感の辞典』, 東京:岩波書店, 2010年.
- <sup>5</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.
- <sup>6</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.
- <sup>7</sup> 森田良行『基礎日本語辞典』, p. 674f., 東京:角川書店, 1989年.
- <sup>8</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.
- <sup>9</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.
- <sup>10</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.
- <sup>11</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.
- <sup>12</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.
- <sup>13</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.
- <sup>14</sup> 村上春樹『海辺のカフカ』, 新潮文庫, 東京:新潮社, 2007年.
- <sup>15</sup> 村上春樹『海辺のカフカ』, 新潮文庫, 東京:新潮社, 2007年.
- <sup>16</sup> 野内良三『「偶然」から読み解く日本文化』, p. 5, 東京:大修館書店, 2010年.
- <sup>17</sup> 垣坂弘紫『廃墟の戯れ』(オンライン小説).
- <sup>18</sup> <http://sonytime.t.jza.ne.jp/blog/entry>.
- <sup>19</sup> 野内良三『「偶然」から読み解く日本文化』, p. 46, 東京:大修館書店, 2010年.
- <sup>20</sup> 野内良三『レトリックと認識』, p. 67, 東京:

日本放送出版協会. 2000 年.

<sup>21</sup> 野内良三『「偶然」から読み解く日本文化』, p. 47f.

東京：大修館書店, 2010 年.

<sup>22</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.

<sup>23</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.

<sup>24</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.

<sup>25</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.

<sup>26</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.

<sup>27</sup> KOTONOHA 現代書き言葉均衡コーパス少納言.

<sup>28</sup> [www.sanspo.com/baseball/news/20160809/den160809/den16080915290003-n1.html](http://www.sanspo.com/baseball/news/20160809/den160809/den16080915290003-n1.html).

<sup>29</sup> [www.raitonoveru.jp](http://www.raitonoveru.jp).

<sup>30</sup> 村上春樹『騎士団長殺し』第1部 顕れるアイデア編, 東京：新潮社, 2017 年.

<sup>31</sup> Globe, *Can't Stop Falling in Love*, avex globe, 1996 年.